

言葉が詩であるために

斎藤美衣

言葉を使わない日はない。会話をすると、用件を相手に伝えるとき、一人で考え事するときにも言葉を使う。ではそんな日常に使われる言葉と、詩歌のなかの言葉とは同じであるのか、違うものなのか。

陸月都の第一歌集『Dance with the invisibles』を読んだ。タイトルの『Invisible』は「目に見えないもの」。

SNICKERSにあめりかのやはらかなビニール 会ひたき人と会へるだけ会ふ

上の句では、具体的な商品名から引き出される触覚を中心に言葉が構築されている。輸入菓子の包装の手触りから、生と死を孕んだ日常へと視点は飛躍をする。下句は当たり前のことをあえて言っているようで、改めて言葉にするって箴言めいた響きを帯びる。

会ひすぎるほど会ひしかどしだいしいに会はずなりいまはまつたく会はず

安立スハル『この梅生ずべし』
「会」という日常的な言葉を使いながら、人と

の関わりの変化をユニークにうたう。これら二首では、言葉のリフレインによって日常から逸脱した世界を見せる。詩歌のなかの言葉が詩として機能するためには、詩のための特別な言葉を使うのではなく、むしろ普通の言葉によって文体、文脈状上のずれやねじれを生むことが必要だろう。

「現代詩手帖」二〇二一年十月号の特集「定型と／の自由」を読み返した。佐藤文香、山田航、佐藤雄一による「俳句・短歌の十年とこれから」という座談会が行われている。

山田が萩原慎一郎『滑走路』、鳥居『キリンの子』、犬養楓『前線』を挙げて、「プロフィールのドキュメンタリー性をもって読まれていく。そういった作品の特徴として、文体的な実験はほとんどされない」と指摘している。

『Dance with the invisibles』は、プロフィールのドキュメンタリー性に支えられるのではなく、言葉そのもの、言葉による文体的な実験を通して独自の世界を作り出そうとしている。プロフィール性を排しながら、作者のジェンダーや社会的な意識を透底させ、言葉

に耽溺するだけでは終わっていない。

春の夜によそふシチューのころころとこどもの顔沈みみるごとく

家売る 家のかはりに少しだけお金をもらふ約束をする

シチューの具をこどもの顔に例える。不動産の売買が小商いのように描かれる。詩のための特別な言葉を用いるのではない。普段の生活と地続きの言葉を使いながら、それが持つイメージを解体し、再構築する。

掃き寄せてしまへばどうつてことはない
落ちてると花首なだけど

平井弘『振りまはした花のやうに』
とても小さな靴下が落ちてゐる渋谷の秋の谷底にゐる

陸月都『Dance with the invisibles』
平井弘のこの歌でも、落ちた花首を掃き寄せるという普通のことと別の視点を与えて生死を連想させる。陸月の歌では、渋谷、靴下などの普通の言葉で日常の景色を捉え直す。

普段の景色、知識や価値観の当たり前さを脱ぐ快感が詩を読む理由の一つだろう。詩歌を書くことは、日常では届かない深さまで言葉と潜つていき、他者とコミュニケーションを取ろうと試みることだと思ふ。『Dance with the invisibles』はそんな一冊だ。